

エミリ・ディキンソン詩抄訳：1850-60年の詩より

原口, 遼

<https://doi.org/10.15017/2332574>

出版情報：文學研究. 89, pp.187-218, 1992-03-25. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

エミリー・ディキンソン詩抄訳

—1850-60年の詩より—

原 口 遼

ここには Emily Dickinson (1830-1886) が詩を本格的に書き始めてからの最初期の約10年間、即ち、詩人の19歳から29歳頃までの詩（即ち1850-60年に書かれた詩、ジョンソン版の1番-216番の詩）の中から64編の詩を翻訳し掲載した。翻訳に当たっての基準は特に定めていない。比較的よく知られている詩を中心に翻訳し、紙幅の制限上一応29歳までの詩に限定したのである。残りの詩の翻訳も継続的に掲載予定である。

底本としては Thomas Johnson, ed., *The Complete Poems of Emily Dickinson* (Faber and Faber, 1975) が便利であるのでこれを使用した。訳はすべて拙訳である。

[4] この不思議の海上を
無言で航海して行く、
おお！水先案内よ、おお！
お前はかの岸辺のことを知っているか。
荒波も咆哮せず、
嵐も過ぎ去りしかの岸辺のことを。

西方の平安なるかの地では、
船が沢山休息している。
錨をしっかりと降ろして。
かの地へお前を特別に案内しよう。

ほら陸地だ！永遠だ！

ついに上陸だ！

- [6] しばしば森はピンク色、
しばしば茶色。
私の生まれ故郷の裏手では、
岡がしばしば服を脱ぐ。
私は山の天辺が飾り羽根を付けるのを、
しばしば見かけた。
また、木が葉を落としたあとに、
しばしば山肌の割れ目を見つけた。
聞くところによると、
地球は地軸の上で廻っているとか。
すばらしい回転だ！
ほんの十二カ月で廻り切るとは！

- [12] 朝は日一日と内気そうになり、
胡桃は段々色づき出し、
苺のほっぺは丸々と膨らんで来て、
薔薇の姿が町から消えた。

楓は鮮やかなスカーフを纏い出し、
野原は緋色のガウンを纏い出す。
私も、流行遅れにならないよう
何かアクセサリーを着けましょう。

- [13] 眠りは
正気の人たちからは
眼を閉じることとされている。

実は眠りは大きな駅で、
その両側には
立ち会いの人々が立ち並んでいる。

朝は
高貴な人々からは
夜が明けることとされている。

でも、本当の朝はまだ訪れていない。

それはオーロラの如きもの、
永遠の東、
あざやかな旗持てる者、
赤き装束の者、
それこそが夜明けなのだ。

[21] 勝つからこそ負けもある。
賭博師はこのことを想起しつつ
またもや骰を振るのだ。

[25] あの子は樹の下で眠っていて、
私だけが覚えていた。
私はその子の沈黙の揺籠にそっと触れてみた。
その子は私の足の触れたことを認めると、
急いで真っ赤な服を着た。
さあ彼女をご覧ください！

[31] 夏の日が飛び去って行ったら、
私を貴方の夏の日にしてください。
夜鷹とオリオールが鳴き終えたら

私を貴方の音楽にしてください。

私は貴方のために花咲かせようと、墓を跳び越し、

私の花びらをそちらに漕ぎ寄せましょう。

どうぞ、私を摘んでください、

アネモネの花を。

永遠に貴方の花なる私を。

- [32] 貴方よ、バラが花咲くのを止め、
 堇の花も終わったら、
 まるはな蜂が荘重な飛行で、
 太陽の彼方へと去って行ってしまったときには…
 この夏の日に、
 花を摘もうとしてしばし止まった手も、
 鶯色の中で、詮なく手持ち無沙汰となるでしょう。
 そのときはきっと、私という花を摘んでください。

- [33] もし思い出すことが、忘れることなら、
 私は思い出していないことになる。
 もし忘れることが、思い出すことなら、
 私はほとんど忘れたも同然。
 もし立ち去った人をいとおしむのが、楽しみなら、
 逝った人を悼むことは、むしろ陽気。
 今日、この花を摘んだ指の、
 何とまあ楽しそうであったことか。

- [45] この部屋の内側には
 眠りより静かなものがある。
 それは胸の上に小枝を飾り、
 それが何かを告げはしない。

誰かがそれに触れ、誰かが接吻する。
誰かがその動かぬ手をさする。
それは私の理解できぬ
単純な荘重さを持っている。

私がもし彼らの立場だったら私は泣かない。
啜り泣くなんて何と礼儀知らずなことか。
泣くと静かな妖精をびっくりさせて、
棲家の森へと追い返すかも知れない。

心の単純な隣人たちは
「早すぎた死」のことを話す。
私たちは婉曲法を使って言う、
「鳥たちが飛んで行った」と。

- [47] 心よ！ 私達はあの方のことを忘れましょう。
お前と私とで、今宵こそ。
お前はあの方がくれた暖かさを忘れなさい。
私は光を忘れるのだから。

お前がすっかり終えたら、どうぞ教えて、
私がすぐに取りかけられるよう。
急ぐのよ。お前が躊躇している間にも、
私はあの方のことをまた思い出しよう。

- [49] 私が失ったことは二度きりだが、
それは芝土の中へだった。
私は神の戸口の前に
二度乞い願う者として立った。

天使たちが、二度とも降りて来て、
私が貯蓄していたものを返してくれた。
強盗よ！ 銀行よ、父なる者よ！
私はまたもや貧しき者になってしまったのだ。

[51] 学校からの帰り道

私はしばしばその村を通りかかった。
そして村人達がそこで何をしているのかと訝しがった。
なぜそんなにもひっそりしているのか、と。

その時、私は召される
年を知らなかった。
時計によると、
他の人々が出かけた時より早かったと言うのに。

ここは落陽の刻よりも静か。
暁よりもすずやか。
雛菊達すらここを訪れる。
小鳥達も舞い降りて来れる。

だから、あなたが疲れ、
困惑し、寒かったのなら、
その土盛りの下の
愛情こもった約束のことを信じて、
「私よ」「ドリーを入れて」と声を上げなさい。
そうすれば、きっと私が抱いて上げるから。

[52] 私の帆掛舟は海へ出て行ったのではないか、
突風に会ったのではないか、
小鳥に魅せられて、

帆を順えたのではないか。

今日はどのような神秘に魅せられて
繋留させられているのだろうか。
こうした心配事が、
湾を見遥かす眼の務め。

- [56] もし私がおめでたい日に、
薔薇の花を持参しなくなったなら、
それは私が、薔薇の向こう側へと
召されたから。

もし私が薔が記念する
名前を口にしなくなったなら、
それは死の指が
つぶや 呟く唇をびったりと閉じてしまったから。

- [67] 成功は決して成功することのない者に、
最も甘く感じられる。
甘露の味が分かるには、
最も強い渇きが必要。

今日軍旗を奪い取った
紫色の軍団の中には、
勝利とは何かを
ヨリ明確に告げられる者は誰一人いない。

戦いに敗れ、痺れた耳に
勝鬨の音が、
苦悶の中に明瞭に湧き上がる、

その瀕死の若者以上に。

- [73] かつて失ったことのない者は、
宝冠を見出そうとする熱意がない。
かつて渴したことのない者は、
葡萄酒や冷やしたタマリンドを探し出す熱意がない。

何里も疲れて登ったことのない者は、
ピサロの海岸の
紫色の領地へ
探険の足を踏み入れる資格がない。

どれほどの軍団を失ったかと、
皇帝は尋ねられるだろう。
革命の日に、
何本の軍旗を奪われたかと。

何発の銃弾を受けたか、
名誉の傷はあるかと。
天使達よ、この兵士の額に
「昇進させる」と記すのだ。

- [76] 歓喜とは内陸育ちの者が
海へと出かけること。
家々を後にし岬を後にし、
深い永遠へと向かうこと。

私たちは山国育ちだから、
陸から初めて沖へ一漕ぎして行くときの
あの聖なる陶酔のことを、

船乗達に理解ができるだろうか。

[77] 「脱出」という言葉を聞くと

すぐと血が騒ぐ。

期待が忽然と湧いて来て、

羽根が生えた気分！

大牢獄が兵士達によって

破壊されたと聞くと、

必ずや私は子供の様に格子窓を引っ張ってみる。

そしてまたもや裏切られてしまうのだ。

[78] 可哀相な破けた心は、ぼろぼろになった心は、

休息しようとして腰を下ろしたときにも、

暮れ行く夕日が銀色をして

西方へと流れて行ったの知らなかった。

夜の帳が静かに降りたのも知らなかった。

星座が輝き出したことも知らなかった。

ただただ、見知らぬ緯度の

幻を探し求めるあまりに。

ふとそこを通りかかった天使たちが、

この塵にまみれた心を見つけ出すと、

優しく苦しみより助け起こし、

神の元へと連れ去った。

そこでは、裸足には履物が用意してあり、

突風を避けて皆が集められており、

青い港が、手を取って

彷徨う帆船を導いているのだった。

[82] これは誰の頬なのか。

誰の薔薇色の

顔が今日赤みを失ったのか。

私は彼女を――迷った五つ星を――森の中で見つけ、

そこから安全に連れ帰った。

言い伝えでは、駒鳥たちが

そうした者達を葉で蔽い隠すという。

でも、どれが頬で、

どれが棺衣なのか、

私がいくら調べても区別がつかない。

[83] 私の心ほど重苦しい心を持たない人が、

夜遅く家路をたどっていた。

私の窓辺を通りすぎるとき、

口笛で唄を歌っていた。

なにげないバラードの一節みたいな、

町のはやり唄みたいな節回しだった。

でも私の神経の疲れた耳には

とても甘い鎮痛剤であるかのように響いた。

それはあたかもボボリンク鳥が

こっちの方へと翔んで来たような感じで、

さえずっては間を置き、またさえずりしながら、

とだえとだえしながら、ゆっくりと消えて行った。

それは小川のせせらぎが、

埃の道でその足を血でにじませながら

ミヌエットを踊って、

なぜ血がにじんだのかを知らないかのようだった。

明日もまた夜が訪れるだろう。

多分疲れて傷ついて。

ああ、口笛の人よ！ 私の窓辺を
もう一度通りかかってくれますように。

- [86] 南風が花たちを押し、
まるはな蜂がやって来て、
飛び交い、ためらい、
蜜を飲み、そして去る。

蝶たちがカシミヤへ行く途中で
やって来ては立ち止まる。
私は、そっと花を摘んで、
ここに差し出します。

- [87] はっとする恐怖、虚勢、涙...
朝、目が覚めて
なぜに目覚めたかを知っては、
違った夜明けの空気を吸い込む。

- [89] 飛び行くものがある。
鳥、時間、まるはな蜂。
これらに挽歌はいらない。

留まるものがある。
悲嘆、岡、永遠。
これもまた私に似合わない。

休息しながら、しかも立ち昇って行くものがある。
私に天空のことが説明できようか。
なんと静謐に謎は横たわっていることか。

[90] 私の手の届く所にあったのだ。
手を伸ばせば触れることも出来たのだ。
その方向へ通りかかったかも知れないのだ。
何気なく村を通りかかったように、
何気なく村を後にした。
牧場の中では、
何も知らぬげな堇の花があったのに。
だが、小一時間前に通り過ぎた
求める指にはもう遅すぎる。

[92] 私の友達は鳥に違いない。
なぜなら、飛ぶから。
私の友達は有限の命の持主に違いない。
なぜなら、死ぬから。
それは蜂のように髭を生やしている。
ああ、変な友達！
お前は私の頭を変にする。

[99] 新しい足が私の庭を歩き、
新しい指は芝土を揺すり、
楡の梢の上の吟遊詩人が
寂寥を現わす。

新しい子供たちが緑の上で遊び、
疲弊した者達が下では新たに眠る。
そしてまた物思わしげな春が廻り来たり、
そしてまた雪が正確に降る。

[105] うわべでは、頭を垂れながら、
後から、こんな姿勢は

不滅の心持てる自分たちには
似つかわしくなかったなどと思い返す。

そんな態度はひそかな高慢さを示しています。
あなただって曖昧さをよそおいながら
ガーゼ地の上で、
蜘蛛の巣みたいに古臭い態度を取っているのだと云った風な。

- [106] 雛菊がそっと太陽の後を追う。
そして太陽の金色の散歩が終わったとき、
その足元に羞かしげに腰を下ろす。
眼を覚ましたとき、太陽は花をそこに見つける。
物盗りか、お前はなぜここにいる。
なぜって、太陽様、愛は甘美ですもの。

私達は花、あなたは太陽。
お許してください。お日さまが西に傾かれるとき、
私達が密かにあなたに寄り添おうとしたとしても。
だって私達は去り行く西の空に、
平安、はかなさ、紫水晶に、
つまりは夜の可能性に、魅惑されているのですもの。

- [107] 湾をよちよちと出て行ったのは
ちっちなちっちな舟でした。
おいでおいでと手招きしたのは
優しい優しい海でした。

岸辺の方角から舟を一舐めにしたのは
欲深な欲深な大波でした。
私のちっちな舟が消えてしまったのに

堂々たる帆掛船の方は気づきもしませんでした。

[108] 外科医はメスを取るとき、
細心の注意を払うべき。
そのデリケートな切開口の下で
未決囚が蠢いているのだから――生命という未決囚が。

[111] 蜂は私を恐がらない。
私は蝶も知っている。
森の中の可愛い住人達は
私を温かく迎えてくれる。

私が行くと小川は声を上げて笑い、
微風も狂おしく踊る。
なのになぜ汝の銀色はわが眼を霞ますのか。
ああ夏の日よ、なぜ。

[119] 乞食に対しては注意深く話さない、
南米のポトシ銀山や鉱山やらのことは。
飢えた者には恭しく話さない、
御馳走やワインのことは。

自由の身になった者とすれ違ったなどは、
徒やおろそか、囚人にはほのめかさないこと。
土牢の中では空気のエピソードは、
時には恐ろしく甘美に聞こえるのだから。

[125] つかの間の恍惚のために
私達は苦悩を支払わなくてはならない。
恍惚に対するに

鋭く震える比率の苦悩を。

麗^{うるわ}しかるべきほんの一時のために、
幾^{いくとせ}歳ものしんどいあてがい扶持や、
切ない思いで奪い取った小銭や、
涙であふれる宝石箱が必要なのだ。

[126] 喚声を挙げて戦うことは、とても勇ましい。

だが胸の奥底で
苦悩の騎兵隊と戦う者こそ、
さらに雄々^{いさか}しいと、私は知っている。

誰が勝とうと、国家は見えていない。
誰が倒れようと、誰も見えていない。
死に行く者の眼を、故国の誰が
愛国者の熱愛をもって見つめてくれるというのか。

そんな者のために、きっと天使たちは
羽根飾りをつけ、雪の制服を着て
隊伍を整え、足並み揃えて、
行進してくれるものと、私達は信じた。

[127] 「家がある」と賢人達は私に教えてくれる。

「部屋が」と。部屋ならきっと暖かいに違いない。
部屋なら涙を内に招じ入れることなく、
部屋なら嵐も寄せつけないに違いない。

「キリストの父」による「多くの部屋が」と。
この私はその方を知らないが、気持よく建てられているそうだ。
もし子供達がそこへ行く道を見つけだすことができるのなら、

今夜も誰かがまたてくてくと歩いて行くことだろう。

[130] 今は鳥たちが戻ってくる頃、
その数はせいぜい一、二羽どまりだが、
後^{うしろ}を振り返ろうとして戻ってくる。

今は空がまたもや試みるとき、
例のあの晴朗の6月の詭弁を。
そして青空と金色の葉で誤解させる。

ああ、蜂蜜をすら騙すこと敵わぬまやかしののに、
お前のもっともらしさが、
ふと私を信じ込ませそうになる。

種達が皆、秋の証人台に立ち、
臆病そうな葉はそっと
改まった空気の中を急ぐ。

ああ、夏の日の秘蹟よ、
ああ、霞の中での最後の聖餐式よ、
一人の御子を加えさせよ。

あなたの聖なる^{しろし}微に与るために。
あなたの聖なるパンと
不滅の葡萄酒とを頂かんがために。

[133] 子供達がお客様に「お休みなさい」と言って
しぶしぶベッドに向かうように、
私の花たちも可愛い唇を上げて挨拶し、
それから寝巻を身につけます。

子供たちが目覚めたとき
朝が来た、と陽気に跳ね回るように、
私の花たちも百のベビーベッドから
外を覗き、またもや跳ね回ることでしょう。

- [134] たぶんお花を買いたいというわけね。
でもお花を売るわけにはいかないのよ。
もし、お花を借りたいのなら、
村の城砦の門の下で、

ラッパ水仙の花が、
黄帽子の紐を解くときまでだったら、
蜂達がクローバーの花々から
白葡萄酒の蜜液を吸いあげてしまうまでの間だったら、

それなら、その時までならお貸ししましょう。
それ以上は一時間たりとも延長できないことよ。

- [135] 水は、渇きが教えてくれる。
陸は、渡ってきた大洋が、
恍惚は、苦悶が、
平和は戦鬪の物語が、
愛は、記念の墓土が、
鳥は雪が、教えてくれる。

- [150] あの人は死んだ、次がそのときの様子です。
最後の息をつくや
粗末な服を取り上げて
太陽の方に向かって出発しました。
天使達は彼女の小さな姿を

天国の門のところに覗き見たに違いありません。
それというも天国のこちら側で
私は彼女のことを再び見つけられないから。

- [158] 死のうとしています！ 夜中に死のうとしています。
誰か明かりを持って来てくれませんか、
私が永遠の雪の中へと入るのに
どの道を取ったらよいか分かるように。

それに「イエス様」！ イエス様はどこへ行かれたのか？
イエス様が必ず来られると聞いていたのに。
恐らくイエス様はこの家の事をご存じないのだ。
こっちは、イエス様。イエス様をお通しして！

誰か玄関の門の処へ駆けて行って
ドリーがやって来ていないか、見て来て頂戴。 お待ち！
私はドリーの足音が階段に聞こえる！
死も苦しくはありません。ドリーが今ここに来ましたから。

- [160] 助け出されたとき、私は気を失いかけていた。
世界が通り過ぎるのを感じていた。
息が戻って来たとき、
永遠の始まりへと身構えていた。
その時、潮ががっかりして、
向こう側へと引いて行くのが聞こえた。

だから、私はその境界線の風変わりな秘密を告げるために
帰って来た者であるかのように感じる。
異国の海岸線を巡る船乗りや、
封印される前の恐ろしい扉口から

生還した青ざめた報道員であるかのように。

次は、きっと留まってやろう。

次は、耳に聴こえず

眼にも判然としない

あの物をきっとこの眼で見してみたい。

次は踏み留まっていたい。

何十年かが密かに通り過ぎ、

何世紀かがゆっくりと歩み去り、

輪廻の輪がぐるりと廻ってですら。

- [162] 私の川は汝へと流れて行く、
青い海よ！ 私を迎え入れてくれるか？
私の川は返事を待つ。
ああ、海よ。私に優しくせよ。
私は木漏れ日の差すおちこちの隅より
溪流達を連れて来るのだから。
さあ、海よ、私を受け入れよ。

- [164] 母さん鳥は、たとえ他の木に止まっていますが、
決して小鳥達のことを忘れません。
母さん鳥は、これまで通りにしよっちゅう
優しく見下ろしています。
ちょうど小さなこの世の巣を、
細心の注意で編み上げたときのように。
もし、一匹でも「雀たちが落っこちた」ならば
母さん鳥は天から、きっと「気づいて」くれています。

[165] 傷ついた鹿が、一番高く跳ね飛ぶと、
獵師が言うのを聞いたことがある。
それは死の恍惚そのもので、
草叢は後、静かになる。

水を吹き出すのは砕かれた岩。
跳ね返るのは踏まれたバネ。
頬はいつでも発熱で刺される箇所が
他の箇所より赤い。

陽気さは苦悩の鎧で、
その下で注意深く武装する。
誰かが血を見つけ出して
「君は傷ついている！」と叫ぶことのないように。

[167] 丁度、盲人が太陽のことを知るように、
苦痛ゆえに喜悦を知る。
牧場に清流が流れていると思いつつ、
渇きで死んで行くとは。

故郷、時、青く懐かしい
大気の思いに取りつかれつつも、
異郷の岸辺に、
望郷の念やみがたくたはずむ。

これこそ至高の苦悩。
これこそ最大の苦悶。
これらの者達は忍耐強い桂冠詩人で、
彼らの声は下界で訓練され、

絶え間なく讃歌を歌いつつ昇天する。

だが、神秘の詩人の声は
私達、鈍感な音楽の生徒には、
如何せん聴こえない。

- [170] 肖像画と普段の顔とは、
繻子のチョッキを着、
上品に術学的ぶった陽光と、
黄昏時の西空みたいなもの。

- [172] それは歓喜！ それは歓喜！
私が万一失敗したなら、何と惨めなことか。
でも、私ほど惨めな者もなかったので、私は一振りに掛けた。
そして勝ったのだ。そう、迷った挙句のことだったけれど。
勝利はこっちのものだった。

生は生に過ぎない！ 死も、死に過ぎない！
幸福も幸福にすぎなく、息も息に過ぎない！
そして実際、もし私が失敗したにしても、
少なくとも最悪のを知ることは甘美なこと！
敗北とは敗北以外の何者でもなく、
それ以上に惨めなことは、起こりようはずもない。

それでもし私が勝ったのなら！ ああ、船の祝砲よ、
ああ、尖塔の鐘よ、
まずは緩やかにそれを報ぜよ！
なぜなら、天国は変わった所で、
揣摩臆測のうちに、突然眼が醒めるとそこが天国...
私を滅ぼしてしまうかも知れないのだから。

[174] ついに、判ってもらえるのだ。
ついにあなたの脇にランプが灯り
これからの人生を見ることが出来ます。

真夜中を通り過ぎた！ 明けの明星も通り過ぎた！
昇る朝日も通り過ぎた！
ああ、私たちの脚とそして日の光との間には、
何と長い道程があったことか。

[181] 先日、私は世界を一つ紛失しました。
誰か見つけた方はいませんか。
額の回りに星が一行、
散りばめられているので分かります。

お金持ちは気にも止めないでしょうけど、
でも、私の懐しい眼には、
金貨より価値があるのです。
ああそれを見つけて下さい、私のために。

[185] 「信仰」は紳士たちが見てとれる時は
結構な発明品です。
でも緊急の時は
顕微鏡こそ賢い選択でしょう。

[187] 何度この衰弱した足はよろめいたことか。
今ははんだづけされた口だけが告げることができる。
試みてもみよ。恐ろしい鋸が揺すぶれるかどうか。
試みてもみよ。鋼鉄の掛金を開けられるかどうか。

しばしば熱かった、今は冷たい前額を撫でよ。

お望みなら、生気の失せた髪の毛を掻き揚げよ。
再び指抜きをはめることもない、
大理石の指に触れてもみよ。

部屋の窓では、蠅が物憂げな音をたてて飛んでいる。
しみの着いた窓枠を通して、太陽が堂々と輝いている。
恐れげもなく、蜘蛛の巣が天井から垂れ下がり揺れている。
主婦が一人雛菊に包まれて、怠惰に横たわっている。

[189] 泣くことはとても些細なこと、
溜息をつくのもほんの一時のこと。
でもこんなに小さな、それらを引き替えにしながら、
私たち男も女も死んで行くのだ。

[199] 私は妻。私はそれを終えた。
反対の状態を。
私は皇帝。私は今や女で、
こよなく安定している。

この柔らかな日蝕の裏では、
少女の頃の人生が何と奇妙に見えることか。
私が思うに、今や天国にいる人たちにとっては、
地上のこともこんなに奇妙に感じられることでしょう。

これが快適なのなら、それならば
もう一方は、苦痛だったのだ。
だがなぜ比較する必要がある。
私は妻！ それでもう十分。

[201] 二人の者が円材の上で藻掻いていた。

ついに朝日が射したとき、
一方の者は笑顔をみせて、陸地の方を振り向いた。
ああ神よ！ もう一方の者は！

たまたま通り掛かった船が、
水間に漂う
一つの顔を見つけたが、
その眼は死んでいながら、乞うかのように見上げており、
両手は懇願するかのよう、投げ上げられていた。

- [207] 私がどんなにか遅く、どんなにか遅く帰宅しても、
私が帰宅しさえすれば、それで万事埋め合わせができる。
皆んなが私を待つことを諦めた頃であればこそ、
恍惚はいや増すことであろう。
夜の帳が、黒く、押し黙るようにして降り、
皆んなが思いもかけず私のドアを叩く音を聞いたとすれば、
何十年もの苦悩から醸されたこととて、
その瞬間の喜びは天にも昇る気分だろう。

暖炉の火がきつと赤々と燃え、
私が何を言うかと期待して、
長いこと騙され続けて来た人達の眼がこちらに向けられ、
そしてまたその人達が私に何を言い掛けるだろうかと思うと、
何世紀もの長かった道程も消え去ってしまう。

- [208] 薔薇色が彼女の頬の上で跳びはね、
胴着が上がり下がりする。
彼女の可愛い言葉が、酔っ払った男のように
可哀相によろける。

彼女の指は編物をまさぐり、
運針が進まなくなる。
何がそんなに可愛い女の子を悩ませているのか、
思ってみても、私は首を傾げてしまう。

すると反対側に、もう一人の頬がちらと見えたが、
そっちも同じく薔薇色だった。
まさに反対側に。そちらも何かを語ろうとして、
酔っ払いのようによろけていた。

チョッキが、彼女の胴着と同じく踊った。
不滅の曲に合わせるかのように。
そしてついにこの二つの悩ましい、小さな心臓は
そっと時を刻んで行って、一つになった。

- [210] そんなに薄い皮膜の下の考えは、
かえって明瞭に見られてしまう。
丁度、レース織が肉体の盛り上がりを見わし、
薄霧^{うすもぎ}が、アペニン山脈の姿を見わすように。

- [211] エデンよ、そっと来ておくれ。
汝に慣れていないわが唇は、
汝のジャスミンを吸うのが気恥ずかしい。
丁度失神しかかった蜂が、

花のところに遅れて飛来して、
花房の周りを飛び廻りながら、
甘い花蜜を数えつつ、
中に入り込み、芳香の中に失神するかのよう。

[213] もし釣鐘草が恋人の蜂に対して
腰紐を弛めたとしたなら、
蜂は釣鐘草のことを
これまで通りに崇めるでしょうか。

もし「天国」が口説かれて
真珠のお掘りを手放したとしたら、
エデンはそれでもエデンでしょうか。
伯爵はそれでも伯爵でしょうか。

[214] 私はこれまで決して造られなかったお酒を飲む、
真珠のタンカードから。
フランクフルトの蔲果でも
こんな飲物は決して造れまい。

私は、大気に酩酊し、
露の放蕩者となる。
果てることなき夏の日に、
青空酒場から酔っ払って千鳥足で出る。

「酒場の主人」が酔っ払った蜜蜂を
ジキタリス酒場の戸口から追い払っても、
蝶がちびちび酒を飲むのを止めても
私はさらにもっと飲み続ける。

天使達が雪の帽子を振りながら、
そして聖者達が窓辺に駆け寄って来て、
このちっちゃな酔っ払いが
太陽に寄り掛かっているのを見つけるまで。

[216] 雪花石膏の部屋の中で身を守られて

朝が来ても動かされず、
昼が来ても動かされず、
復活を待ち設ける者達がおずおずとして横たわる。
繻子のたる木に、
石の屋根！

彼らの頭上のお城では
微風が軽やかに笑い、
蜂が鈍感な耳元でしゃべくり、
優しい鳥たちは無邪気な韻律で囀っている。
ああ、ここには何という聡明な者達が滅んでしまっていることか。

(1859年作)

参考にした邦訳詩集

ディキンソン詩の邦訳は過去に幾種類か出されているが、その中から参考にした邦訳を掲げて謝意を表す。これまでに邦訳された詩編の検索には大本剛士編『エミリ ディキンソン：日本におけるエミリ ディキンソン書誌（1927-1985）』（専修大学出版局1986年）が便利である。なお、大学紀要、同人誌の類に掲載された翻訳も相当数あると思われるが、それらは必ずしも参照していない。

ディキンソン詩の翻訳について一言述べるならば、日本語の表現のこともさりながら、一番の問題は各詩の理解においてどこまで深い理解に達したか（語彙・文法の面、イメージやアルージュの面等々）であり、そうしたプロセスを深化させ、ある所まで行くと、これまでの邦訳では間尺に合わない部分が必要や出て来るようである。その点、既存の邦訳はあくまでも参考という事になり、従って、拙訳に際しては過去の邦訳を点検調査する事には必ずしも熱心になれなかった。既訳に対して敬意を表するにやぶさかではないが、こうした事情からすべての邦訳に当たってみるという労を取らなかった事を断っておくのである。

最後に蛇足を付け加える。拙訳を批評的に読まれる方々に対してだが、ディキンソン研究家の方々には、ディキンソン詩の難解さは周知の事であるので、いまさら付言の必要もあるまいが、ディキンソン詩のセミ玄人か素人の方々に対しては、原書を手にされたら是非自分で翻訳してみられよ、と勧めたい。その後、下記の中島訳か谷岡訳が比較的網羅的であるので、自らの試訳とそれらの翻訳本および拙訳等と照らし合わせて見られたらよかろう。もしお望みならば、ジョンソン版の Nos. 21, 25, 49, 105, 130, 162, 199, 201, 208, 216 の10編の詩などを試みられてみられたらよろしいかと思う。その上でご意見、或いはさらに適切な解釈、ないし翻訳があれば拝聴したいものである。

- 新倉俊一著『エミリ・ディキンソン 研究と詩抄』篠崎書林 1962
- 中島完訳『詩集 自然と愛と孤独と』国文社 1964
- 中島完訳『詩集 続自然と愛と孤独と』国文社 1973
- 中島完訳『詩集 続々自然と愛と孤独と』国文社 1983
- 山川端明・武田雅子編訳『エミリ・ディキンソンの手紙』弓書房 1984
- モーディカイ・マーカス著 広岡實編訳『ディキンソンー詩の評釈』大阪
教育図書 1985
- トーマス・H・ジョンソン著 新倉俊一，鶴野ひろ子訳『エミリ・ディキン
ソン評伝』国文社 1985
- 稲田勝彦著『エミリ・ディキンソン 天国獲得のストラテジー』金星堂
1985
- 谷岡清男訳『愛と孤独と エミリ・ディキンソン詩集』I, II, III ニュー・
カレント・インターナショナル 1987-88
- 岡隆夫訳『エミリイ・ディキンソン詩集』桐原書店 1987 本書は絶版につ
き入手できなかつた。

INDEX OF FIRST LINES OF POEMS TRANSLATED

Following the first lines of the poems are the poem numbers in accordance with those of the Johnson edition. No attempt is made to reproduce the exact punctuation or capitalization of the lines as they appear in the Johnson text.

- A darting fear, a pomp, a tear, 87
A poor torn heart, a tattered heart, 78
A wounded deer leaps highest, 165
As children bid the guest "Good Night," 133
At last to be identified, 174
Come slowly, Eden, 211
Did the harebell loose her girdle, 213
Dying! Dying in the night, 158
Exultation is the going, 76
"Faith" is a fine invention, 185
For each ecstatic instant, 125
Frequently the woods are pink, 6
Heart, not so heavy as mine, 83
Heart! We will forget him, 47
"Houses" - so the wise men tell me, 127
How many times these low feet staggered, 187
I lost a world, the other day, 181
I never hear the word "escape," 77
I never lost as much but twice, 49

I often passed the village, 51
I taste a liquor never brewed, 214
If I should cease to bring a rose, 56
If recollecting were forgetting, 33
I'm "wife" - I've finished that, 199
It's such a little thing to weep, 189
Just lost, when I was saved, 160
Mama never forgets her birds, 164
My friend must be a bird, 92
My river runs to thee, 162
New feet within my garden go, 99
On this wondrous sea, 4
Perhaps you'd like to buy a flower, 134
Portraits are to daily faces, 170
Safe in their alabaster chambers, 216
She died - this was the way she died, 150
She slept beneath a tree, 25
Sleep is supposed to be, 13
Soul, wilt thou toss again, 139
South winds jostle them, 86
Success is counted sweetest, 67
Summer for thee, grant I may be, 31
Surgeon must be very careful, 108
Talk with prudence to a beggar, 119
The bee is not afraid of me, 111
The daisy follows soft the sun, 106
The morns are meeker than they were, 12

The rose did carper on her cheek, 208
The thought beneath so slight a film, 210
There's something quieter than sleep, 45
These are the days when birds come back, 130
Tho' I get home how late - how late, 207
'Tis so much joy! 'Tis so much joy, 172
To fight aloud, is very brave, 126
To hang our head ostensibly, 105
To learn the transport by the pain, 167
'Twas such a little, little boat, 107
Two swimmers wrestled on the spar, 201
Water, is taught by thirst, 135
We lose - because we win, 21
When roses cease to bloom, sir, 32
Whether my bark went down at sea, 52
Who never lost, are unprepared, 73
Whose cheek is this, 82
Within my reach, 90